

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370100

研究課題名(和文) リストのオペラ編曲研究 音楽的、美的、社会文化史的考察

研究課題名(英文) A Study of Liszt's Opera Transcriptions: Musical, Aesthetic, and Sociocultural-Historical Approaches

研究代表者

上山 典子 (KAMIYAMA, NORIKO)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・講師

研究者番号：90318577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はフランツ・リスト(1811-86)が生涯を通して取り組んだ70曲におよぶオペラ編曲を網羅的に取り上げ、以下の2点を主たる成果として得た。第一に、これまで明快に整理されてこなかった「アレンジメント」、「トランスクリプション」、「ピアノ・スコア」といったリスト自身が編曲に付与した独自名称の区別と各名称の意味合いを、リストの言説および編曲手法の分析から明らかにした。そして第二に、オペラ編曲のジャンルがリストの創作人生、編曲の歴史において、音楽的そして美的にどのような意味と意義を持つのか、さらには19世紀の音楽生活においてどのような役割を果たしていたのかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Among many which Franz Liszt (1811-86) transcribed for piano, operatic excerpts which amounts to 70 occupy a special position. This study dealt with Liszt's transcribing of opera which were taken up almost continuously over a period of half a century.

First, the study paid special attention to so far very complicated and ambiguous terms, "Arrangement," "Transcription," and "Piano Score (Partition de Piano)," all of which originate from Liszt himself. By examining each concept of them and suggesting various types of transcribing based on these terms, it became evident that Liszt used a certain type for a particular period of time. Second, the study examined the meaning and the significance of Liszt's operatic transcriptions as a genre, in his life as a composer, in the history of arrangement, or in 19th-century music life, respectively.

研究分野：西洋音楽史

キーワード：西洋音楽史 19世紀 リスト 編曲 オペラ

1. 研究開始当初の背景

フランツ・リスト(1811-86)が作成したオペラを原曲とするピアノ 2 手用、4 手用、2 台用のための編曲(以下、「オペラ編曲」)は 70 曲にのぼる。リストの芸術活動のあらゆる時期、わずか 13 歳だった 1824 年から 70 歳を超えた 1882 年に至るまでの長期にわたり継続的に取り組まれていたことを考えると、オペラ編曲はリストの創作人生において特別な位置を占めていたと理解される。

また、選択された原曲のほとんどは彼の同時代の良く知られた作品だったことから、リストのオペラ編曲は 19 世紀の劇場レパートリーを、すなわち当時の音楽文化を支えた聴衆、市民階級の趣味をそのまま反映するものと言えるだろう。19 世紀前半の数々の劇場で旋風を巻き起こしたジャコモ・マイヤーベア(1791-1864)のオペラから 5 作品、ジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)4 作品、ガエターノ・ドニゼッティ(1797-1848)6 作品、ヴィンチェンツォ・ペッリーニ(1801-35)5 作品、また世紀後半のオペラ界に君臨したジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)から 7 作品、リヒャルト・ワーグナー(1813-83)12 作品、そしていまや二流作曲家の二流オペラとしてほとんど忘れかけられているものの、当時の聴衆には絶大な人気を誇った作品の旋律や場면을素材にした編曲を数多く完成させたリストは、間違いなく、19 世紀、そして西洋音楽史におけるオペラ編曲の最重要人物のひとりである。リストの芸術を、そして当時の音楽文化を理解するうえで、リストのオペラ編曲は決して無視できない重要な位置を占めているのである。

しかし、リストのオペラ編曲を個別作品としてではなく、ジャンルとして包括的に扱った先行研究は国内には事実上存在せず、また国際的にも非常にわずかであった。オリジナル作品のみが芸術的で、編曲は非芸術的な生産品という固定観念の時代はすでに去って久しいものの、編曲を研究対象として扱うものは依然として数少ない。これまでの音楽学研究は、19 世紀音楽文化社会の中心的地位にあったであろうリストのオペラ編曲に十分な光を当ててこなかった。

そこで本研究はリストのオペラ編曲それぞれの取り組みを個別的に、かつジャンルとして包括的に扱うことにした。リストが生涯を通して取り組み続けた 70 曲ものオペラ編曲を網羅的に取り上げることを出発点とした。

2. 研究の目的

本研究はリストのオペラ編曲を取り上げ、完成された 70 曲の「ジャンル」としての位置づけを問い、当時そして音楽史的視点からの評価を行う。リストの創作史において、少なくとも量的に決して小さくはない位置づけを占めてきたオペラ編曲はどのような意

味合いを持っていたのか。編曲の長い歴史のなかで、どのような位置づけにあるのか。また市民の音楽文化がいまだかつてなく興隆し、演奏会や出版が盛んになった 19 世紀の音楽生活において、リストのオペラ編曲はどのような役割を果たし、世紀前半・後半それぞれの音楽社会文化史にどのような貢献を残したのだろうか。こうした点を総合的に見つめ直すことで、音楽史におけるリストの(オペラ)編曲の意味合い、意義、功績を考察する。

3. 研究の方法

本研究は以下 2 つの方法により、リストのオペラ編曲それぞれを 1 つの作品として、また 70 曲全体をジャンルとして考察した。ここではリストが残したそれぞれのオペラ編曲の分析を主な手段とする「音楽的考察」と、リストが出版したこれらの編曲譜の伝搬状況とリストが演奏会やピアノ・レッスンの現場で取り上げた回数や頻度等を主な考察対象とすることで 19 世紀の音楽社会におけるオペラ編曲の位置づけやあり方を問う「美的・社会文化史的考察」とに分類し、それぞれの年度に分けて行った。

なおこれらの考察にあたっては、リストが主にコンサート・ピアニストとして活動していた 1847 年までの「世紀前半」と、ピアニストを引退した 1848 年以降の「世紀後半」とに大別し、それぞれの時期の編曲の表現方法とその手段に注目することにした。

4. 研究成果

第一に、これまで極めて曖昧のままにされてきた「アレンジメント Arrangement」、「トランスクリプション Transkription」、「ピアノ・スコア Partition de Piano」といったリスト自身が編曲に付与した独自名称の区別と各名称の意味合いを、リストの言説および編曲手法の分析から明らかにした。

第二に、世紀前半と後半それぞれにおける音楽的、そして美的・社会文化史的考察により、以下の点を主張した。

すなわち、それまでの編曲には見られなかった新しいスタイルと様々な効果をもたらした世紀前半のリストのオペラ編曲は、具体的に次のような成果をもたらした。まずもってそれらは自身の演奏会レパートリーの拡大に貢献した。また 1839-47 年のヴィルトゥオーソ・ピアニスト時代だけでも 1,000 回以上に及んだそうした演奏会を通して、原曲のかたちで聴くことの出来ない当時の人気オペラが、西はイベリア半島、東はモスクワ、そしてアイルランド、イギリスからトルコまで、ヨーロッパ中の人々に届けられた。またピアノの楽器としての発展を背景に、リストは編曲および演奏の双方においてその楽器

の潜在能力を最大限に活用し、そして拡大させた。

一方、19世紀後半の音楽界ではヴィルトゥオーソ人気の陰りやサロン文化の衰退とともにオペラ編曲の全盛は去り、編曲譜の出版も概して縮小傾向の道をたどり始めていた。にもかかわらず、リストの編曲活動は以前にも増して意欲的に取り組まれていったこと本研究はこの点に注目した。そのなかで、この時期のリストのほとんどのオペラ編曲は、完成後まもなく、あるいは遅くとも数年以内にヨーロッパの主要都市で出版されていたことが分かった。世紀前半に完成した28曲の2手用オペラ編曲のうち、約2割に当たる6曲は当時印刷されなかったのに対し、世紀後半の取り組みでは31曲のすべてが出版されていた。しかも複数の土地で複数の版が出されたものも少なくなかった。

さらに、1870年代以降リストの音楽活動の中心を占めるようになったピアノ教師としてのレッスンにおいて、編曲は原曲に匹敵する頻度と重要度をもって取り扱われていたことも、注目すべき点となった。

リストのピアノ用編曲 なかでもオペラ編曲は、19世紀初頭までのアマチュア向けや舞台上のエンターテイメント的な編曲とは異なる新しい価値と価値観を呈するジャンルとしての確立を意味するものであったことが明らかとなった。リストはオペラ編曲に美的、歴史的価値を与え、19世紀を特徴づける創造的ジャンルとして確立させた。リストにおいてオペラ編曲は、芸術的性格を獲得したと言える。

技巧的難度においても表現的深みにおいても、それまでにない高みへと転換させ、ジャンル・ヒエラルキーにおける地位を昇格させたリストのオペラ編曲は、音楽愛好家による演奏の可能性をほとんど、あるいはまったく考慮していないという点において、同時期に量産されたほかの編曲家による製品とは明らかに異なる。しかしリストはオペラ編曲が生み出す音楽表現の可能性を、世紀前半は自らの演奏により、また世紀後半は楽譜出版と弟子たちによる演奏という手段を通して、当時の人々、そして後世に伝え残したのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計 2 件)

1. 上山典子 「リストによるヴァーグナーのオペラ編曲法と『トランスクリプション』、『アレンジメント』、『ピアノ・スコア』の独自名称」『静岡文化芸術大学研究紀要』15号(オンライン版) 57-66頁、2015年3月

2. 上山典子 「リストのマスタークラスにおける編曲の役割」『静岡文化芸術大学研究紀要』17号(オンライン版) 87-98頁、2017年3月

【学会発表】(計 2 件)

1. 上山典子 「ワーグナー＝リストのオペラ編曲における歌詞の『器楽化』」日本音楽表現学会第14回大会(於 拓殖大学北海道短期大学) 2016年6月5日

2. 上山典子 「リストのピアノ・レッスンにおける編曲の役割」日本音楽学会第67回全国大会(於 中京大学) 2016年11月12日

【図書】(計 1 件)

1. 『音楽表現学のフィールド2』上山典子 「音楽文化史におけるリストのオペラ編曲」(第3章) 日本音楽表現学会編、東京堂出版、206-221頁、2016年9月

【産業財産権】

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

【その他】

翻訳(1件)

・リスト作曲、ウーバー校訂、上山典子 訳、『リスト 超絶技巧練習曲』(ウィーン原典版) 音楽之友社、2015年11月

web 事典項目執筆(12項目)

・『ピティナ・ピアノ事典(楽曲解説編)』web版 全日本ピアノ指導者協会編、上山典子、ワーグナー作曲＝リスト編曲のピアノ2手用編曲、「リエッツィの主題に基づく幻想曲」、「タンホイザーより巡礼の合唱」、「おお、おまえ、優しい夕星よ」、「さまよえるオランダ

人より」 「マイスタージンガーより」 「パル
ジファルより」 「イゾルデの愛の死」 「オラ
ンダ人より糸紡ぎの歌」 「タンホイザー序
曲」 「ローエン格林とタンホイザーから 2
つの小品」 「ローエン格林より 2 つの小品」
「ニーベルングの指輪よりヴァルハル」
2015 年

6 . 研究組織

(1)研究代表者

上山 典子 (KAMIYAMA, Noriko)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・講師
研究者番号：90318577

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()